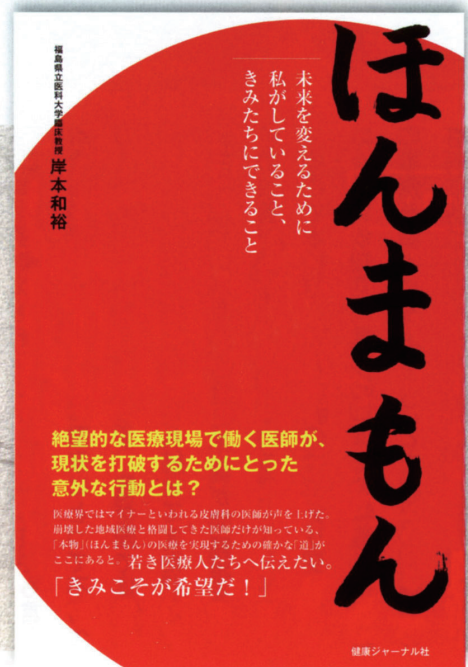


『ほんまもん』

未来を変えるために私がしていること、きみたちにできること』

岸本和裕 著

- 発行：健康ジャーナル社
- 体裁：四六判並製・256頁
- 定価：1,400円（税別）



まがい物が蔓延る世の中で、最後に実力を発揮するのは「本物」、著者の言葉を借りれば「ほんまもん」だということ。

著者の岸本和裕氏は、会津若松市にある竹田総合病院の皮膚科科長。すでに東日本大震災前より皮膚科医数が極端に少ない福島県内で、過酷な環境に身を置き、崩壊した地域医療と10数年にわたって格闘してきたという。

“医療に限らずどんな職種でも「知識」や「技術」を習得して豊富な「経験」を積むことは、良き仕事をする上での「必要最低限の条件」に過ぎない”。そう主張する著者にとってでは何が大切か。「言葉」が織りなす「人間学」だ。

疲れ果て、打ちのめされた著者を救ってくれた数多の「言葉」たち。生きている言葉は実存の炎を孕み、それが人の心に伝わり感動を与えてくれる。言葉には偉大な力が潜んでいる。そのことを揺るぎない信念に変えたのは、著者の講演を聴講し前向きな感想を寄せてくれた学生たちの存在だった。知識の吸収とスキルアップ優先の教育にどっぷり浸かった若き世代。しかし彼らも実は「生きた言葉」を求めている。血となり肉となった言葉が育む「人間学」。それが「ほんまもん」の医療への確かな道なのだと著者はいう。

本書に付け加えさせてもらえば、「人間学」の根底にスピリチュアルなものを見る視点だろうか。目には見えない存在への畏敬。日本人ならば“お天道様が見ている”という言葉が子どもの頃よく耳にしたものだ。素朴ながらも大切な教え——。道德教育の基本はここにあったのではなかろうか。そ

れがいつしか他人を出し抜くような人間に成り果てていることもまま。利他精神という言葉が死語に近い世の中で、譲ることの美德はすでに過去のものなのだろうか。

確かに著者は医療界ではマイナーと言われる皮膚科の医師。実際3・11の震災時、福島県に留まる多くの医師がいる中で、逃げ出した医師の1割が皮膚科医だったという事実がまた、著者をして“「皮膚科医には『志』と『使命感』が乏しい」という私の考えが的を射ていたことを凶らずも証明する形になった”と言わしめる。昨今では本業よりタレント活動に勤しむ皮膚科医がTVでクローズアップされているのも、その要因の一つだろうか。であればこそ、岸本氏は声を上げ、「ほんまもん」の医療の在り方を提示する。

かつて日本医師会会長だった武見太郎氏は、“医療は医学の社会的適応”と定義した。しかしこれはマクロな視点で普遍性を持つとして、日々の診療というミクロな領域では、「人間学」に根差した医学＝医療こそが求められているのではなかろうか。

読後に残ったのは、“情熱がなければ良い仕事も成し遂げられない”という著者の鬼気迫るほどの熱い思い。世に優秀な人間は沢山いるが、最後にものを言うのは情熱をもって仕事を成し遂げてきた人たちなのだろう。

本書の主軸には、著者の愚直なまでの真摯な生き方がある。“厳しきからしか「本物」は生まれぬ”。一貫して著者の眼差しは安きを突き抜け、「ほんまもん」へと向かっている。